地域再生
行政に頼らない感動の地域づくり

豊重哲郎　鹿児島県鹿屋市柳谷自治公民館長

柳谷自治公民館の活動と「やねだん」の概要

「やねだん」は、鹿児島県鹿屋市串良町上小原の人口314の集落、柳谷（やなぎだに）の通称。サツマイモや芋焼酎、手打ちそば、土着菌を利用して栽培した自然薯などの販売で集落独自の財源を築く。生業は畜産業が中心で、ウシやブタなどのふん尿の臭いは自前の土着菌で消している。

活動は、東京ドームでイチローの試合を観戦することを目標に、高齢者を指南役に高校生たちが休耕畑でサツマイモを栽培することからはじまった。初年度の収益33万円で、1998年は福岡ドームで観戦。サツマイモの栽培は、やがて集落全体の事業に発展。デンプン用に出荷していたサツマイモは、2003年から焼酎「やねだん」に生まれ変わって収入も増加。2006年の余剰金は498万円で、122の全世帯に1万円のボーナスが出た。

2000年には、地域の子ども向けに「寺子屋」を開設する。そのほか、緊急警報装置も設置。「迎賓館」は高齢化に伴う空き家の増加対策として集落内の空き家を修復した施設で、2006年から事業を開始。日本各地から移住してきた芸術家などが居住する。芸術家の作品は、閉店したスーパーの建物を改装した「ギャラリーやねだん」で展示販売されている。集落内には有線放送設備があり、1988年から集落放送が流されている。2007年には、Uターン現象や迎賓館事業の効果で人口増に転じた。

私は55歳のときから、「地域づくりの基本的な土台づくりに10年かければ、モデル的な住民自治ができるのではないか」と考え、あれから17年が過ぎようとしています。その16年間をスクリーンに流しながら、私の話を聞いていただきます。キーワードは「住民自治」と「財源」と「還元」です。

最初のキーワード「住民の自治」は、自分たちでやれることは自分たちでやろうというものです。第二の「財源」は、10年間くらいで補助金無用の社会をつくろうということです。ただし、10年後に実現していたらそのモデル料くらいはもらう。それには、国も認めるような自治組織を確立することからはじめようと。第三の「還元」は、自主財源で会費制の住民自治をなくすことを軸に、還元すること、開示することを考えようというものです。

私が5年後、10年後に交代しても、この三つの方針が生き続ければと考えています。「あいつがおったから、これができた」という事例は、社会にわんさとあります。けど、それだけではだめです。「交代しても、後継者がそのルールをもっと進化させながら永遠の土台づくりをやろう」、そういう私たちの活動をこれからご紹介します。

地域づくりは言葉と行動から

私たちの活動は、だれも想像しなかった16年間にわたる物語です。ではなぜ、私の地域でこんなことができたのか。簡単にいいますと、逆転の発想でやってきたからです。私は、逆のことをやっているだけです。

私は、住民の2割がボランティアで動いてくれたら最高だと思っています。案外と人は動かないもんです。だけど、還元を開示できたら人は耳を貸します。開示がなによりたいせつです。

逆に、説得をしたら人は外を向くと思います。説得の言葉を出すと、地域の人の抵抗は大きいです。たった一言でそうです。まちがうと、地域の人から、「哲郎は、東京の銀行におったからというて、標準語でしゃべっとる」。標準語だけでしゃべると高齢者には案外と伝わらないんです。「ちょうど」という言葉と「がっつい」っていう鹿児島弁と、どっちがグッとくるかです。

地域づくりは、言葉がたいせつです。ですから私は、やねだんにいるときは、自分の服装をだれにあわせるか、ここから入りました。だから、集落にいるときはスリッパかスニーカーか雨靴。ブレザーはほとんど着ません。それはゲストが着るもんです。300人の住民は、私を地域の代表と思っていますから。

いまのこの寒いときに牛小屋に行きますとね、田舎の牛小屋はドクドクしているんです。珍しい人がくると、犬と同じで牛も尻尾を振ります。へたに近づいてパンと尻尾を振られると、パチャッと降ってくるものがあるんです。フンです。するとじいちゃんが、「哲っちゃん、ごめん」って、びっくりする。そうすると私の心が動かないんです。地域づくりはやっぱし目配り、気配り、心配り。そうして自分の姿をじいちゃん、ばあちゃんに合わせる、もう行動しかないんです。

だから私は、地域を動くときはタオルをぶら下げます。なんのためか。そうやってばあちゃんにパチッときたときに、ばあちゃんの顔を拭いてあげる。そうすると言葉はいらないんです。

バレーボールのコーチ経験がいきる

私は地元の中学校でバレーボールを教えてきました。東京の銀行をやめて村に帰ったのが29歳です。そして母校の中学校で29歳から52歳までバレーボールの監督、コーチをやってきました。しかし、いくら練習しても1回戦ボーイ、2回戦ボーイが2年、3年と続きました。ふと応援席を見て思いました。「これ、勝てるはずないわ」と。レギュラーの父兄しかきていないんです。これではだめだ。練習のときに補欠の補欠の父兄が差し入れにくるような雰囲気をつくらないといけない。

しかし、商業高校しか出ていない私は、教室で教える資格はない。部活は学習の延長線上にある。外からきた私はバレーだけ教えて、授業時間のバレー部員は私を振り向くこともない。「この裏返しをやらないと校長に迷惑をかける」、そう思った私は、コーチング学を学びました。いろいろなことを考えながら、外堀の外堀を埋める、補欠の補欠をばいかに本気にさせるか。

かつては、外の運動場にバレーボールのネットが張ってあって、そこで練習していました。練習になって、ネットから離れて待っていてバーンとはじいたボールは運動場の隅っこに転がる。補欠の補欠は、一所懸命に走って取りに行く。この繰り返しです。これでは合理的な練習にならない。勝てるはずがない。それで防球のバリケートをつくる知恵を考えた。そういう体験が、やねだんに生きているんです。

「上手になりたければ、上手なレシーバーの後ろの玉を拾え」。地域づくりも同じで、身近でスピード感のある変革は模倣です。「モデルになる模倣は見逃してはいけない」っていうのは、バレーボールも地域づくりでも同じです。

アイデアは自分のプライベート・ブランド

私の練習に条件が三つありました。「逆転の発想」。出口と入り口とを逆転させて考える。「出口を基本に考えると、かならず入り口にいきつく」っていうのが私の地域づくりのポイント、手法です。「組織をつくってからお金を」では、時間がかかってしまう。自主財源があれば、警報機をつけてあげられる。そうすれば孤独死対策ができる。リタイアされた学校の先生に謝金、油代を払って公民館によんで、基礎学力の弱い落ちこぼれを指導してもらえれば、わからないところを発見する寺子屋がつくれる。ふつうの順番どおりだと、時間がかかって卒業にまにあわない。だから、逆転の発想で出口から開示する。

バレーも同じです。県のベスト4に残りたい。でも、レギュラーだけを育成していてはだめ。すなわち「還元」です。なにを還元してあげるか、考えてみてください。20名のバレーボール部員がいます。どう還元したら子どもは本気になれるか。補欠の補欠、身体能力の低い人、何度も訓練を重ねないと理解できない人、こんな人が部活動に加わっていたらどうするか。みなさんだと、どんな提言をされますか。よーく考えてください。

これが私のいちばんのPB(プライベート・ブランド)です。「おれしか考えつかないよ、これ」。たったこれだけです。負ける方法を考えることができるかどうかです。

一桁の「こと」・「もの」を尊重する

私は東京から帰ってきた29歳で、やねだんで沼地を借り、水を自噴させてウナギの養殖をはじめました。これが私の事業の入り口です。東京の銀行で、東大、京大、上智大、学習院がドンと同期に入ってきたとき、私の心に、「学歴に負けた」という気持ちが突き刺さりました。

私の現場は、お札を数える仕事ばっかしやった。手形500枚をそろばんで計算する。大学卒は検査部、経理部、審査部です。1960年当時の序列は、年功の次は学歴でした。そうしたことで私は、「親のくれたこの体で事業をやって、死ぬまでに1年に1億円の商売をしたい。やねだんに帰ればなにかができる」と水産業にはいった。ところが、それで大失敗して3,000万円くらいの借金です。金利6分のあの時代に、子どもが3人。それでも大学まで絶対に行かせたいと……。

一桁のことを、地域づくりではだいじにしたほうがいいですよ。「一人」、「1円」、「一歩」、「一言」、そんな一桁です。100万円の手形を切って、99万9,999円の現金は返せても1円足りなかったら不渡りですよ、みなさん。不渡りになったら、私の「うなぎの川豊」は日本中の銀行がいっせいに、「不渡りにつき2年間口座取引、銀行取引ストップ」でした。動きがとれなくなる社会ですよ。

地域づくりも同じです。1人を馬鹿にしたらたいへんなことになります。1円を馬鹿にしたらたいへんなことになります。地域づくりでは「一言」。一言のかけ方を間違ったら、「お前のその言葉、なんか天狗だね」。天狗と思わせたら、どんな企画書を出しても、だれも振り向きません。とくにコーディネーターとかリーダーとかコンサルタント、こういったときの基本は、「一桁の数がいかに価値の高いものかを考えた企画のほうがベストだよ」と考え、私の場合は出口から考えます。

自分の力で心を揺さぶるアイデアを生み出す

みなさん、バレーで本気にさせる方法をお答えできる人はいますか。すなわち練習法です。バレーで負ける方法を考えたら、9m先のネットを越せなかったら試合にならない。そうするとわかってきますね。「球を上げることができれば、あとは叩くだけだね。そしたら球の横を叩いてみろ、それがスクリューボール。左のサイドを叩けたら、どうなるか。次に右を叩いたらどうなるか。下からじゃなくて上から叩いたら、止めたらどうなるか」って考えさせる。「おッ、お前流だ」っていう考え方でいかに本人を乗せてあげるか、やる気にさせるか、私はこれしかやりませんでした。

そのなかでたいせつなのは、友だちグループにいるボス。

悪いボス、良いボス、学びの友だちのボス、いっぱいいます。そういう人のアイデア活用。人は掛け算のように効果的なことはなかなかできません。かといって、一つずつしか前に進まない地域活動では飽きがくる。やっぱり、掛け算がいい。では、コーディネーター的な人間の仕掛けはなにか。思考力がなかったら、マンネリ化してネタ切れになります。思考力とは、「相手の心をいかに読んで、いかにその気にさせる見方ができるか」。思考力の「考」はアイデア、ヒント、これしかない。

「哲郎はよう考えつくね」って、講演が終わるとよく言われます。「ヒントはどこから得ましたか。だれの話を聞きましたか、どんな本を読んでこられましたか」ってよく聞かれます。違うんです。本気で考えるアイデア養成所は、自分だけのもんです。真似から入ると、自分の力がなくなってきます。だからPBはアイデアです。このことをぜひ、みなさん考えてください。

「感動」の地域づくりをめざして

地域づくりで難しいのは人集めです。人を集めるのに、みんなあの手この手をやってきました。JAの総会があると、人が集まらないから「先着50名さまには洗剤を配布します」っていう時代がありました。でも、もらったら帰っちゃうんですよ。心が動いていないからですよ。物(ブツ)だけが動いている。地域づくりは心を揺さぶるアイデアを出さないと、とてもじゃないけど……。

金で人を動かそうとすると、絶対に足元をすくわれます。そう考えたときに、なにが必要かっていったら、なんちゅうたって人徳です。一人の力です。一人の力で人の心を感動で揺さぶったら、感謝に変わります。

私の逆転の発想は、「人が集まらないようにするにはどうしたらよいか」から入りました。人が集まらない第一の理由はなんでしょう。人が集まらない第一候補なんでしょう。ここはディスカッションの場所ですから、みなさんといっしょに考えてみましょうよ。「それだったら集まるはずないわ」って。

「つまらない」、「感動を与えられない」、「おもしろくない」、いろいろ答えがありますね。地域づくりは自分の言葉で語ってください。真剣に考えると案外と出るものです。当たっているとか、当たっていないとかいうもんじゃない。自分で考えたものがベストです。私の場合は、こう考えて答えを導きだします。その答えにいきつく体験を、次にお話しします。

地域づくりの第一歩

私はやねだんの自治公民館館長ですが、これは一つの集落の町内会長のようなもので、慣例的に65歳前後の人がなるのですが、私は投票で95％の支持を受けて55歳で就任しました。「豊重は借金もなくなったらしい。バレーとうなぎの養殖と蒲焼き屋で借金を返した。哲郎に任せたら、あの努力で準限界集落のやねだんを変えると思うよ」と、PTAのOBたちが火をつけた。私の後ろ姿を見てくれていた先輩たちです。このように他人が推薦してくれたら、なによりも感動します。私の心を動かした。私はこれに応えようとがんばった。私が大腸癌になったら、9割の家の人が見舞いにきてくれるまでになりました。

館長になったとき、私はこう言いました。「集落のみなさん、10年早いけど、推薦された以上は引き受けます。その代わり三つ言わしてください。一つは、事業をやって自主財源を獲得して還元し、会費のない社会をつくりましょう。自治公民館の7,000円の会費集めを止められたら最高だと思います」。

私がこう言ったら、私を推薦したボスが、「哲郎待て。お前だったら県やら町やらとのルートを知っているから補助金をもってこられる。だから、おれたちは賛成した。なんで補助金がいらないのか」。私はすぐに言いました。「おじいさん、畑を貸してもらえば、サツマイモを植えます。それが売れたお金で活動できたら、高齢者が7,000円の会費を納めなくてもよい。これがいちばんだと思う」って言ったら、「それならわかった、おれの野を貸してやる」。こう言ってくれたおじいさんが、いま91歳です。

還元の言葉を、みなさん、ともに考えてください。「行政に頼らなくても、地域でできる住民自治、地方自治」は、私の言葉です。でも、「役所から手を切られて、どんな地方自治ができるか」っていう立場の人もいますからね。

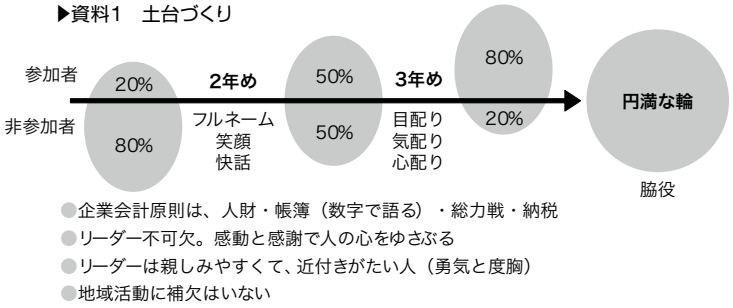
「他己満足」を実現する

二つめに私が言ったのは、「みなさん、私は自薦ではありません。選ばれたんです。3年間やらせてくれますか」って言ったら、「10年でもよか」と手を叩いてもらった。ばあちゃんが、「哲っちゃんお願い、なんとかして」と泣いて言った。あれから、とうとう17年です。なぜ続いたか。1年に1コマずつしか提案していないからです。イベントをやらないからです。自分で喜ばないからです。これだけのことです。

それに「他己満足」。みんな自己満足からはいります。損か得かからはいります。私は、ボランティアの固まりだと思っています。「自ら実践して」、「自分から」っていうのがボランティアの語源です。コミュニティって言いながら、ボランティアって言いながら、「弁当はでないし、油代もでないのに……」。いつしか社会のかたちが変わってきている。でも、原点を忘れたら終わりです。自己満足に陥ったら終わりです。「ありゃあ、自分のために言っているんだがね。名前と顔をテレビと新聞で売って……」。そうなると、次の言葉はおわかりでしょう。「おれたちを踏み台にして、哲郎は名前と顔を売って。市長にでも出るつもりやろうが」。こういう人が出てきたらもう、反目されます。

これが、人集めはなぜたいへんかの私の答えです。逆転の

▶資料1　土台づくり



●企業会計原則は、人財・帳簿（数字で語る）・総力戦・納税
●リーダー不可欠。感動と感謝で人の心をゆさぶる
●リーダーは親しみやすくて、近付きがたい人（勇気と度胸）
●地域活動に補欠はいない

▶資料2　柳谷住民にボーナス1万円

発想の私の言葉は、「天狗に思われたら終わりだ」です。天狗と思われたら、人は絶対に集まらない。そういう危険は、すぐそこにいるんですわ。

バレーボールをやっていましたが、バレーではかならず勝者がいると同時に敗者がいます。その分析ができるかです。難しくありませんので聞いてください。

自己満足をやめて、他人を満足させる。これは、勇気と度胸がないとできませんよ。自分一人でものを考えて天狗感覚をなくすと、人は「優しいね、親切ていねいだよ」って、裏返しがくるんです。ところが、これを間違える人がいるんです。「偶然的」と「必然的」。地域づくりもバレーも同じです。たまたま勝つムードのチームができあがるときがあります。負け続けていて、これで勝ってしまうと態度が変わります。そうなると子どもがかわいそうです。犠牲者です。エースが次の試合で捻挫でもしたら、また1回戦ボーイです。七番手、八番手、補欠対策ができているチームは、レギュラーが風邪を引いても、必然的に底上げができている。

地域づくりは土台づくりから

地域づくりも同じです。たまたまグッド・タイミングでできたことに継続性はありません。長続きしません。だから、必然的なことを私たちはこれから考える。なにをするか。それが「行政に頼らない感動の地域づくり」です。わかりますよね。

300人の住民の集落の地域内に、当時は行政マンが11名いました。いまも8名います。「集落内にいる行政マンの範囲内で、企画も活動も組織の役員も動かすことを決めれば、地方自治でいける。行政はパートナーでいこうよ」っていうのが、私たちの考えていた「行政に頼らない」ということです。

だったらどうするか。「土台づくり」です [資料1]。やねだんがこれに失敗していたら、私は交代していただろうし、まさか納税できるところまできていません。ちょっとつっこんでお話しします。

やねだんの土台づくりの基本は、ここにありました。私が1996年度に引き継いで会計帳を見ると、「手持ち繰越金ナシ」とカタカナで書いてありました。「貯金通帳残高10,246円」。監査の印鑑が押してあります。「これでなにができるか」、そんな状態で引き継いだんです。

他人の才能を引き出す役割と価値

考えていきついたのが、「地域が300人の一つの村だと、おれは村長。村長だとすれば、教育委員会もあれば、農政もあれば、福祉もある。すなわち、組織と人材をどう分配、セットするか。人は宝だ」。ここです。補欠は、地域活動にもバレーにもいない。

すなわち、Educe――エデュースといいます。これにtionをつけたらEducationになります。教育です。50代の若造の私が、70代80代の人になにを教えることができるか。Educeは引き出すという意味です。才能を引き出すのがEduce。これにtionをつけたら名詞になって教育となります。

バレーを教えていたときは、どうやって父兄を引き出すか、試合や練習のときに、補欠の補欠の力をいかに引き出し、汗させて本気にさせるか。これしか考えていませんでした。地域づくりもEduceです、引き出すこと。

地域経営にも必要なのが「企業感覚」

やねだんは企業感覚をもったファミリー・カンパニーだと思っています。企業会計原則は、みなさん帰られたらホームページなどで勉強してください。経営の基本です。企業の状況を数字でしゃべることができなかったら、銀行も証明書は出せません。その数字が認められるには、総力戦です。

では、なぜ企業は納税するのか。税金は補助金を出す元です。やねだんも、小さな金額だけど収益の4割を納税しています。国税は所得税です。確定申告すると、800万円までの純益金には、みなし法人も18%の国税がきます。

国税を納めると、県民税と市町村民税までつながって納めることになります。鹿児島県民税は5%、鹿屋市民税は14.7%きます。集落で事業をやっているとみなされます。特別事業税が、確定した所得税の81%きます。トータルすると収益金のおよそ40%は税金です。そうして残ったお金で、やねだんボーナスを支給したんです。ゼロからスタートして3年間で、ここまでこれた。

[資料2]が1万円ボーナスです。これをしなかったら税務署もこなかったかもしれない。でも、いまは500万円、600万円は動いていますから、納税は当然のことです。

アンケートは取らなかったけれど、私が公民館長になって最

初は、住人の8割が「哲郎、おれたちそんなことに興味はないよ。余裕もなくなっているし、他人のことどころじゃないね」でした。そこで、私はなにをやったか。「集落の300人のフルネームを覚えてやる」、ここから入りました。いま314名の住人がいますけど、全員フルネームで言えます。

あとで詳細は説明しますが、「やねだん故郷創世塾」の生徒380名の名前もぜんぶ言えます。なぜかっていうと、名前を覚えるのは私の仕事だからです。本気だから、2時間から3時間で覚えるんです。本気だから「さん」なんかつける暇はないんです。笑顔とフルネーム。いちばん感動されるのは名前で呼んであげることです。だれでもそうです。「ゆうじ、いけ」って言ったら、ドンといきますよ。みなさん、本気で身近な人に感動を伝えるには、納得の言葉を使ってください。納得の行動、企画をしてください。

▶資料3　高校生によるメッセージ放送

町外に住む子どもから母親へのメッセージが流れた。夫に先立たれた一人暮らしの母親を気遣う娘、初めてお母さんに手紙を書いた息子、そして故郷の季節の産物を送り続ける母親に感謝する息子夫婦。放送は集落の高校生クラブ会長が担当し、母と子の心の橋渡し役を務めた

人をその気にさせるコツ

私は、リーダーはいないほうがいいと思います。リーダーは飛びぬけた感覚になる。でも、ヒーロー的な扱いをしてもらいたくはないんです。リーダーという言葉は、世の中からなくしたほうがいいと思う。ヒーローなんていらないじゃないですか。みなさん、私も含めてコーディネーター役をしましょう。パイプ役、駐在員役的な感覚がベストです。

心の揺さぶり方、それは感動しかありません。みなさん、世の中は個の時代です。おれ、己、の延長戦です。人間、プライドの固まりです。そこからフルネームで引き出して、笑いながら感動でハグができたら最高じゃないですか。みなさんが互いに力は寄せあえば、感動は絶対に伝わります。そうしたのちが感謝ですから。

それに、勇気と度胸があるかどうかです。みんな、案外とないんです。勇気と度胸がいるのはなにか。目をあわせることです。目をそらす人がいます。絶対にいます。

バレーの部活も同じです。上小原中学校には男子バレー部と女子バレー部とテニス部と野球部があって、バレー部がだんだん力をつけて県大会でベスト4や決勝を争っていたら、野球部の先生はどんな気持ちになるでしょう。向かってきて競争になればいいんだけど、案外と目をそらすんですよ。「練習時間を早めて6時半で終わることにしましょう」。こういう提言になる。

私の地域づくりで、こんな人をどうやってその気にさせるか。そうして目をそらす人にも、10人くらいのファミリーがいます。じいちゃん、ばあちゃんもいれば、兄弟や自分の子どもがいたりします。1人の現役の人には間違いなく10人くらいの仲間がいます。こういう人たちをどうやって巻き込むかです。

簡単でした、メッセージ放送を考えついたんです。「人を動かすコツ」、それは感動しかないからです。というのも、公民館で忘年会の飲み会がはじまると、みなさん本音が出る。「お前の子どもはいいね、毎年帰ってきて。おれの子どもは15年帰ってこない。さあ、どこにいるものかも……」。そういう話を耳にしたんです。私の考えたメッセージ放送というのは、母の日、父の日、敬老の日に、東京などに住んでいるやねだん出身者に、父母などへの感謝メッセージを送ってもらい、それを高校生たちに朗読してもらって全戸に有線放送で流すというものでした[資料3]。

なにが人の心を動かすのか

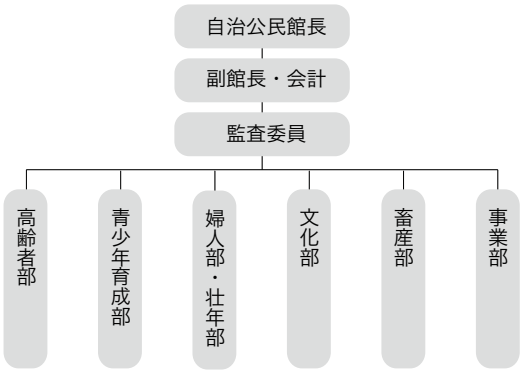
館長はアンテナだから、目配り、気配り、心配りです。「この人、おれに反目しているけど、おれがこの人の子どもの居場所を見つけてメッセージでドンと感動させてやる」って思った。じっさいに放送をはじめると、いっぱいメッセージが届きます。「おるよ、教えるわ」。同級生、親族を探しつけることは警察に言わなくてもできます。ただし、だいじなのは、そうやってメッセージ放送をはじめるタイミングです。絶対にあるのは「旬」。

私に反目している人の子どもを探しだすと、メッセージが届いた。これを父の日に放送しました。「お父さんとはよくぶつかりあい、数多くの喧嘩もしてきましたね。私が家出をしたりして、お父さんは私の写真をもって警察によく走りましたね。もの心がついてから家を出るまで、お父さんは怖い人だと思っていました。いまいろいろ考えると生きていくなかでとても重要なことを教えていただきありがとうございます。今年は孫を連れてかならず帰ります」って。

そうやって放送が終わりました。終わったら最後に私がマイクを取ります。「集落のみなさん、朗読してくれた高校生に大いなるエールの拍手をお願いします。許可なく放送したことをお許しください。いまからメッセージの現物をお届けにあがります」。

そうして、活動に背を向けていたこの頑固おやじの家を訪ねました。「ピンポーン」って5、6回鳴らしても出てこない。最後の1回と思って名前を呼ぶと、涙か洟かでグシャグシャの顔で出てきた。やっぱりハグしました。感謝の涙で私に抱き

▶資料4　やねだん組織図



▶資料5　わくわく運動遊園

建設中

全景

▶資料6　サツマイモ栽培

▶資料7　土着菌製造作業と分担表

土着菌を飼料に1.5%ていどの割合で混ぜて直接牛に食べさせることで、牛の体調もよくなり、畜産臭気をなくす。そのおかげでハエも減少している

つき、「娘に憎まれていると思っていた。ありがとう。子どもの気持ちがこの歳になって初めてわかった」と、いつの間にか私の強烈な支持者になっていました。日ごろ言えない親への感謝、故郷をあとにした親への気遣い。スピーカーから聞こえるその声は、みんなを感動させたと思う。

人と人との絆がすべての基本

もう一つ、地域での活動の動かし方を、話しておきますよ。地域ではもう一つ、メッセージで納得させたあとの押しがたいせつなんです。1回で終わったのではだめです。次はなにか、反目者の生年月日くらい覚えてください。バースデーの一言です。「3月18日、誕生日おめでとうございます」と。「なんで、おれの誕生日を知っているんだ」。館長だから備忘録をもっていますからね。ここたいせつですよ。

私は、バレーボールを教えながら誕生日の子どもに声をかけてきました。そうすれば行動がぜんぜん違いますよ。みなさんも地域づくりを考えられるときは、できれば半径100mの人たちの名前とかを頭に入れておく。これは無駄にならないからやってください。

どこまでの周囲、半径かを自分で決めて、その人たちの勢いとムードを上げれば、「認めてくれてありがとう」につながります。次へのステップに絶対につながります。親しみやすいことも必要ですが、ときには勇気と度胸をドーンと出すくらいの力も蓄えてください。

やねだんの組織と活動

活動を支える組織も必要です[資料4]。やねだんでは、70歳になると高齢者部です。中学の親までは青少年育成部です。そのOBは婦人部・壮年部です。それに文化活動は、やねだんの永遠のテーマですから文化部。ここに空き家対策、高校生クラブ、イベントクラブを設置しています。

それに、畜産の町ですから牛が500頭、豚が7,000頭います。畜産部はなんのためにあるか。二つあって、一つは生産意欲をみんなでどう維持するか。もう一つが、家畜の悪臭公害防止策を集落で考える。これがのちに土着菌の生産につながります。

自主財源を支えるシステム

あとは事業部です。生産性です。地域づくりは生産性がなかったら継続はできません。経済的な保全と担保があるから企画ができる。韓国に行ったときに「あの健康遊具、いいねえ」となって、やねだんにふさわしい4機を自分たちで設計して、100万円かけて集落の近くにある鉄工所につくらせました。財源があるから健康遊具もつくれたんです。

私の館長手当がいま70万円です。会計が20万円で合計90万円です。各専門部に30万円ずつ会計から補助金、交付金を出します。自主財源があるから出せるので、外から補助金を持ってきたのではとてもじゃないが続かないし、組織を動かすこともできません。

やねだんでは、事業部が芋、焼酎、土着菌、加工品を販売して自主財源をつくります。10年めに余剰金が500万円に

▶資料8　土着菌センター

土着菌センターの完成（上）。集落の各家庭から一つずつ提供してもらった民具を保存・展示する「お宝歴史資料館」も併設。地域学習の拠点としても活用される。左下は土着菌動機作業、右下は土着菌を畑に拡散する作業

▶資料9　土着菌の効果

土着菌使用　　土着菌無使用

▶資料10　土着菌を使用してつくった野菜

自然薯　　トマト　　桜島大根

なったのでボーナスを出したんです。いまは85歳以上の人にはボーナスを毎年出しています。動かないはずがないですね。「高齢者の会費はなくなって、補助金がくるわけだから芋植えくらい手伝うのは当然よね」。「土に触って元気になって、電磁波が流れて体にもよい」って説明を時に私はしますが、たいせつな項目です。

やねだんの組織は、そのように企業感覚であると同時に、館長は現金通帳に触れないシステムだということ。事業をやっていると、私の立場はかならず疑われます。私が誇っているのは、組織と帳簿をつねに考えながらやってきたこと。私が交代しても、亡くなっても、このシステムは永遠に残る。レール、土台ができあがっている。私はこれに3年かけました。

総工費8万円の「わくわく運動公園」

これからは、地域医療という問題が出てきます。私は、「地域医療は、見守ってくれてありがとう」だけではだめだと思う。高齢者には地域の人と会話させる、外に出てきてもらう。「土に触るだけでもアースして、電磁波が流れて健康にもプラスになるんだよ」と。外でコミュニティをつくる時代は、やねだんにもきております。

私の最初の事業は、串良町が買い上げたまま放置されていた澱粉工場の跡地、20アールを借りて「わくわく運動遊園」をつくったこと [資料5]。集落のみんなの手づくりで、ゲートボール場兼多目的コート2面、高齢者や子ども向けの遊具や藤棚などを4か月かけてつくった。みんなで丸太や角材、緑化樹などの資材を提供しあい、集落の大工や左官、造園士が中心になって労働奉仕で完成させた。8万円の予算で1998年に完成しました。

芋焼酎「やねだん」の誕生物語

騙された、じいちゃん、ばあちゃんが写っているんですわ [資料6]。「高校生たちを飛行機に乗せて東京にオリックスのイチローの野球を見に行かせるために芋を植えたいんで、畑を貸してください」って言ったら、騙されたじいちゃん、ばあちゃんがいっぱいおって手伝ってくれました。こういう話題性とドラマがある呼びかけ方をすると、1町歩で100万円ちかくの収益を芋だけであげることまでできる。並大抵のことではなかったんですが。

土着菌を活用すると畜産と農業に大きな進展が

やねだんでは、15年前から土着微生物を手づくりで育てています。山にある好気性の糸状菌を、米糠、水、黒砂糖の糖分を3%くらい入れて、40℃以上で発酵しはじめたら1か月くらい撹拌すると酵母菌ができあがります。

名簿をつくって1年間の作業を地域の住民で分担しました。土着菌を飼料に1.5%ていどの割合で牛に食べさせることで、牛の体調もよくなり、畜産臭気をなくし、そのおかげでハエも減少したんです [資料7]。

いまは、芋の売上げで重機60万円を購入して土着菌センターをつくり、年間3tくらい製造して販売しています [資料8]。土づくりに使ってもらっています。

[資料9] はタマネギです。土づくりでも微生物でこんな差が出るんです。ぜひみなさん、これからは食材にこだわる、無農薬・無科学肥料にこだわってください。その原点は微生物での土づくりです。土着菌の勉強も、ぜひしてください。こうやって集落では自然薯、トマト、いろんなものを無農薬、無科学肥料でつくって食べています [資料10]。

▶資料11　土着菌を芋焼酎に利用

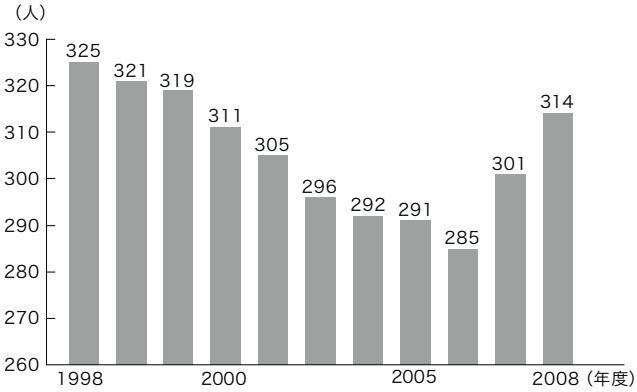
土着菌で発酵させた堆肥で育てたコガネセンガンで、オリジナル芋焼酎「やねだん」を製作しま

▶資料12　まさかのときの緊急警報装置、煙感知器設置（右上）、柳谷集落パトロール隊（右下）

▶資料13　青少年の学ぶ「寺子屋」（上）とおはよう声かけ運動（下）

▶資料14　迎賓館第1号館

▶資料15　柳谷集落の人口



▶資料16　『地域再生――行政に頼らない「むら」おこし』

した。この焼酎が韓国に1回に1,000本、1,600本を福岡からフェリーで輸出している［資料11］。いまはラベルに凝って、91歳になったおばあちゃんが書いています。こうして物語になるからメディアが取りあげてくれる。欲しい方はメールしてください。ホームページで「やねだん」とアクセスしてください。

お年寄りから子どもたちまで手厚く

［資料12］が緊急警報装置です。介護が必要になった人と防犯用に力を発揮しています。

寺子屋とおはよう声かけ運動です［資料13］。これでほとんどの人が親子の関係や名前を覚えた。だから集落にきた人が、「やねだん、どんなところ」って子どもたちに聞いたら、「チームワークのやねだんです」って言うかと思えば、「やねだんからは不良が絶対に出ません」って中学生が平気で言います。なぜでしょう、名前と顔を互いに知って、生まれてからずっと見守ってくれている安心感があるからでしょう。

文化向上は人口増加につながった

［資料14］が空き家を改装した迎賓館です。牛小屋を改装したりするのにやっぱり100万円単位のお金がいるんです。捨てたような家で、持ち主は都会にいて、集落を出た人の孫の時代になっています。この人たちを納得させようと、「集落の財源で修繕するから使わしてください」って言ったら、「捨ててあるんだからどうぞ」。でも、そういう人も固定資産税は納めているんですよ。いまはこういう家に7人の芸術家がきています。そのうちの築150年の家は20人くらいの研修にも使っている。やねだんの大篤農家が持っていた家で、140万円くらいかけて改装した。

人口はすこしずつ増えています［資料15］。1歳児から5歳児の未就学児が今年は12名もいます。こんな地域になぜ変わったか。集落の環境が、文化の環境に変わったからです。「やねだんはよい、寺小屋まである」。ですから、「地域づくりのテーマは文化向上と子どもだ」と、私は言っています。

［資料16］は私が書いている地域再生の本です。今年1月6日に8刷りを出版しました。10冊だけ持ってきています。200ページでスタートして400ページになりました。

地域活動は地域医療にも効果てきめん

わくわく運動公園の遊具です［資料17］。これには20万円かけました。健康管理と話題性は、地域には絶対に必要な機材です。

やねだんの1人当たりの医療費が、鹿屋市1人当たりよりもなぜ35万円も安いかです。介護給付金は40万円安いんです。それを県が2年間追っかけたデータです。私たちは安くなることを目的に活動したことはないんです。10年間の活動の結果として、地域医療がこれだけ安くなるというので、役所が目をつけだして、「やっぱり地域活動をやろう、地域を再生しよう」と。

こういったデータを全国に発信しているもんですから厚生

▶資料17　わくわく運動遊園内の健康器具

医療費、介護給付費が市平均以下

「やねだん」の高齢者は元気

地域活動 好影響

▶資料18　東日本大震災の被災者を歓迎する住民(左)と、被災地にむかう「やねだん号」(右)

やねだん 総出歓迎

福島の3家族10人避難

広がれ支援の輪

労働省も「地域医療と地域活動、こういったことは関連が高いね」っていう段階にきているのかなって思いますよね。

東日本大震災にとり組んだやねだん

震災の被災者もやねだんに避難してきました[資料18]。被災地には、やねだん号が行きました。50万円の予算を組んで、やねだんの高校生たちを震災地に送りました。以下は、そのレポートです。

「8月12日、私たちの冒険がはじまった。みんなも知っている東日本大震災。宮城に私たちは行ってきた。こういうと簡単に行ってきたかのように聞こえるが、やねだんの方がたのご理解、そして交通手段や宿泊場所、行動予定など、いろいろなことを企画してくださったやねだんの役員のみなさんがたのおかげだ。私はまずこのことについて感謝したい」。これ高校1年生の文章ですよ、みなさん。二人めはこういうレポートです。

「石巻にある大川小学校は、津波で70人が亡くなってしまった。いままで4人が行方不明、その行方不明の1人の親が子ども探すために重機の免許を取って、いま探している」。そういう現場に、この子たちは行っているんです。

「ニュースで話題になった大川小学校や津波の被害にあったところを見て回った。初めてテレビで伝えられる限界を知った。津波の映像は見たことがあるが、こんなにひどいものだとは知りませんでした」、「とくに印象に残ったのは防災センター。津波が迫ってくるなか、1人でも助けようと最後まで放送を続けた町の女性職員ものみこまれ、屋上に行った人たちですら助からなかったと聞き、実際に行ってみると3階建てでした」。

地域の子どもの教育は永遠のテーマ

ですからみなさん、地域づくりは教育的配慮を永遠にテーマにしないといけない。その時点だけの満足は自己満足。他己満足にはいきませんよ。私がやねだんの館長になってから生まれた15歳から18歳前後の高校生は、やねだんでずっといっしょに活動、生活してきました。

私は、やねだん号を贈ったときに行った被災地で言葉が出なかった。「来年の夏休みには、やねだんの高校生に現場を見せることが10年後、20年後のやねだんの社会のためになる、現場主義発想とはこの教育だ」と思ったから、今年3月の総会で50万円かけて高校生を派遣するって提案したら、みんな大拍手。高齢者のばあちゃんで泣いている人がいた。帰ってきてからそのレポートを放送で流すと、みんな泣いているんです。すごい体験をしている。

みなさん、震災はボランティアだけではもったいない。1人でもいいから匂いをかぐ、現場を見る。「雑草が生えてきたから、土に威力が出てきたんだな」って、農業高校の女性の人は書いています。みなさん、教育的配慮は絶対に忘れないでください。地域づくりは、文化向上と子どもの教育からはじまるというのは、紛れもなくやねだんのいきついた結論です。

コミュニティ・ビジネスを楽しむ

地域活動はファミリーです。はっぴから手が出なくても、子どもがガイドすれば最高の絵になるじゃないですか[資料19]。

私たちは、地元にあったもの、先人の残した基礎の上に生きている。しかも、過去から未来への通過点にいるにすぎない。地域活動は、そういう先人の遺業をもう一回表に出して、10年後、30年後の未来に向かって企画し、いっしょに活動する。これがわれわれのいまやらねばならない務めです[資料20]。

それには第一に、ビジネス的な感覚が必要です。生産がないと補助金倒れでストップする、そういう社会は避けよう。自主財源を確保しながら、できる範囲でコミュニティ・ビジネス――みんなで会話しながらみんなで喜び楽しみながら、その付録として収益をあげる。

やねだんから拡がる地域経営学

第二に、地域をいかに転ばして経営するか、その地域経営学者をつくるために、やねだん故郷創世塾をやっている[資料21]。や

▶資料19　やねだん芸術祭

▶資料20　地域再生

●円満な「和」を基本に先人たちの偉業を称え先輩の心を敬い、感動と感謝の活動。
●ビジネス感覚と地域経営学を共有し、情熱で人を動かす。
●人間は誰でも社会に貢献できる力を与えられている（もったいな～い!!）。
●リーダーよ！　覚悟しろ!!
●まだまだ、地域活性化には行政依存が必要であり、行政に大いなるエールを送りたい。

ねだんに3泊4日寝泊まりして、現場をみせてあげて、国の官僚たちにも講師陣としてきてもらって、夜も寝ないで考える。ビジネス感覚をもった地域経営学者を、やねだんでどうしてもつくっていこうじゃないかと。

創世塾では3泊4日、1日に1時間か2時間しか寝られない体験をしています。しかも、互いが引っ張りあう磁石の役をしているから、夜中の23時に眠くなるはずないじゃないですか。それを通り越すと、感動と自分が高まったことで、休むことを忘れるんです。一皮むけるっていうのはここでなんです。

じつは、この席に「やねだん故郷創世塾」の京都の塾生が2人きています。京丹波町からと向日町市からです。なんで、私がここにくることがわかるのか。インターネットのメーリングリストで日本各地の380名がつながっているからです。3泊4日の故郷創世塾が12回終わって、同級生380名がつながっている。今年中に500人になる予定です。500人になったら、やねだんでOB大会をやる。そこでの体験をそれぞれが持ち帰って、郷里で引き出していただく。地域のロケーションは違うけれど、身近なチームの柱ができる。感動で人のつながりができればよいのではないか、こう私は考えているからです。

第三に、リーダーは足を引っ張られる。これは覚悟しなさい。足を引っ張られるくらいの飛び抜けたリーダー、「おれについてこい」ではなくて、感動と感謝で情熱的な場を円満につくるリーダーはどうしてもほしい。

最後は、行政依存です。永遠のテーマです。私たちの地域だけではありません。

「ゆりかごから墓場まで」をお世話する

最後に三つのテーマをお話しして終わります。

やねだんの人たちは、高齢になってきました。高齢者が多くなって、去年は7人亡くなりました。昭和一桁生まれの人は、やねだんでもこれから毎年5、6人亡くなっていきます。そうなると高齢者が心配するのはなにか、年金が安い。農業年金は一月に2万円もないんですよ。80代のばあちゃんはなにを心配しているのか。ありがたいことに、この17年間やねだんでは寝たきりが1人もいないんです。

なぜでしょう、80代、90代の家に塾生を連れて行くと、かならず喜ぶんです。「てっちゃん、もう私みたいに夜伽できない人はもういいが」って断るけど、朝行ってみればテーブルにはコップ、お茶碗を50個くらい並べて、風呂敷を被せているんですよ。心では「おいで」って言って、遠慮してるんです。そんな家に連れて行くと、「飲んで行きなさい、飲んで行きなさい」って。これ元気のもとですよ。こうなると個人的にお礼状がいく、年賀状がいくんですよ。それを老人会でもすっごい自慢する。私にも見せにきますよ、「哲っちゃん、この人の住所わかりやすいように書いてくれ」って。行書で書いてあるからです。

そういった人が心配しているのは、ピンピンコロリなんです。やねだんでは、冠婚葬祭規定をつくっているんですよ。高齢者になって年に2回も入院すると「前に、あの人からいくらもらったかな」って記録を見る。「3,000円だった」となると、また見舞いに3,000円を持っていく。やねだんの義理堅いところではあるけど、自分の時代になって、見舞金は1年に1回2,000円ぽっきり。結婚式が1万円で、引き出物は出さない。こういう規定なんだけども、私が館長になってみると、1万円もおれば、5,000円もおって、規定どおりの2,000円は7、8人しかいない。それで見舞金制度をやめようと。

亡くなると悔やみをみんな持っていきますね。2,000円を持っていくと、昔はお菓子とかお茶とかを持ってきてたけど、いまはお返しに1,000円のチケットです。それで個人の見舞金、悔やみ金はやめさせて、祭壇料として30万円から50万円を集落で出してあげようという仕組みにした。そうでないと、悔やみを持っていっても後処理のお礼がたいへんだという時代がくる。

これを今年、やねだんで発表したら、たいていの人が泣いていました。「なんでそこまでしてくれるのよ」。ですから、寝たきりでなくピンピンコロリはたいせつだけれど、高齢者対策をどうするか。あとの処置――「ゆりかごから墓場まで」の墓場を地域でやるところまで、やねだんはきたのかなと。

エネルギー生産はビジネス・チャンス

二つめは、公民館に風力と太陽光の発電機をつけました。5年まえから提言していたことです。ガス代か電気代を無料にしてあげると、高齢者の健康管理につながる。電気代が高く

▶資料21　やねだん故郷創世塾

なると、無理してヒーターをつけない。そうすると足が冷えすぎる。電気代を無料にしたほうがいいと5年まえに採決して、2011年に風力・太陽光発電機を設置した。発電した電気は公民館会議室の照明などに使っています。1メガワットあれば、500戸分くらいの発電はできることを調べてスタートした。

130数戸あって、月にそれぞれ8,000円くらい電気代に使っている。月に1万円で計算すると、みんなで130万円の電気代を自動引き落としで払っている。「1か月に130万円で、1年で1,500万円の電気代を払っているんですよ」って言ったら、みんな「だよね」。「これを無料にする方法がある」って言ったら、「夢みたいなことを言うが」って言う。でも、再生可能エネルギー法案を管直人総理大臣が出してきて1キロワット42円ときたから、「いまだ」って、自家発電と電柱をつくったんですわ。

あとは数字で証明できます。1メガで500戸分の発電ができれば、150戸ぶんは集落で1,500万円の電気代が無料になったうえに、350戸分を九州電力に売電ができる。これはひとつの産業になります。こうなると7桁でなくて8桁の収益になる可能性があります。

後継者を育てつなぐ

三つめ、韓国にやねだん焼酎を輸出しています。やねだんの地域づくりをメディアで知って、地域再生の物語を韓国でもやろうって、ジェイズホテルの金社長がやねだんと交流を始めた。やねだんの焼酎居酒屋が5号店まで韓国にできて、次はフランチャイズ方式をスタートさせることになっています。

こういう三つを実現させました。最後は、やねだんの1歳児から5歳児を横につなげるために、集落で自主財源の奨学金制度を独自につくって、高校に、大学に、専門学校に、留学するっていうときは100万円を基本に、学資の補助金として出してあげることを考えています。焼酎と売電と収益事業が継続すれば、この三つはたぶん、私の後継者のときにはつながると思います。

時間がまいりました。以上で私のお話を終わります。みなさんのなかには、専門の学者がたくさんいらっしゃると思います。新しいことをやねだんにもどうぞ教えてください。お互いに学ばせてください。

第19回安寧の都市ユニットセミナーB
2013年1月12日　京都大学医学部杉浦ホールにて

とよしげ・てつろう◉1960年に鹿児島県立串良商業高等学校を卒業後、東京都民銀行に入社。1971年に串良町に戻りうなぎの養殖をはじめ、1981年にうなぎ専門店「うなぎの川豊」を創業。1979年から1997年まで串良町上小原校区公民館長を務める。1985年には民間主導型の「串良やったる会」を結成。1996年から村づくり活性化アドバイザー、地域活性化伝道師などを務める。同年、柳谷自治公民館長に就任し、現在に至る。